

二次元ドリームノベルズ／PDF立ち読み版

プリンセス
スレイブ *Princess
Slave*
淫虐のサーカス

小説 舞麗辞

挿絵 一枚烏合

| | | |
|-----|--------------|-----|
| 序章 | シエリルとニーナ | 006 |
| 第一章 | 替玉姫の受難 | 025 |
| 第二章 | じゃじゃ馬姫の転落 | 060 |
| 第三章 | 初舞台 | 079 |
| 第四章 | 紅い舌と白い毒 | 106 |
| 第五章 | 綱の上の王女 | 141 |
| 第六章 | 獣の初夜・番われる処女姫 | 161 |
| 第七章 | 堕ちる姫君 | 186 |
| 第八章 | ハッピーエンド | 218 |

登場人物紹介

Characters



シェリル＝フォン＝スティルヴィアンカ

ラゼアニア王国の王姫。快活で好奇心旺盛。剣術を嗜み、王国でも一、二を争う技量を持つ。

ニーナ

シェリルに瓜二つの影武者。その存在はシェリル以外誰も知らない。

ヴィドック＝アルベルト

ラゼアニア王国幹部の大臣。現貴族院議長。

ロメロ

サーカスの団長。

(ああ……姫様ゆるして……わたくし、強くて優しい姫様の影武者なのに、こんなはしたないところを大臣なんかに見せてしまつて……こんな奴に悦ばされてしまつて……)

子供っぽいながら強靱な主と比べ、あまりに脆弱な自分の姿に替玉少女が泣いた。しかしその悲痛さえ、底なしの快樂が飲み込んでしまう。胸の奥にある染みのような悲しみが、淫悦の痺れによつて希釈されてゆくかのようだ。

「くつくつ、堪えないやつめ。お前のような淫売にはお仕置きだ——」

素股責めを仕掛けていた奸臣は少女のむっちりとした太腿の間からペニスを引き抜くと、恥丘に走る亀裂の端で膨れ放題に膨れ上がった淫核を亀頭でもつてぐにゅつと押し潰した。

「きやううつ?! ダメ潰れちゃっんあはうつ!! しうつ、死んじやう——ううつ!」

瞬間、股座から脳天までを針で刺し貫かれたような激震に見舞われニーナが咆哮した。突起を軽く捏ねられただけなのに。腰が腐食したみたいに蕩け、今は触れられていない乳首がピンッと突つ張つた。肌はどつと汗を噴き出して水をかぶつたようになり、地下の冷気のせいで甘い華の香りを含んだ湯気を立ち上らせた。白い柔肌は日焼けしたみたいに真っ赤に染まつており、立ち上る湯気もあつてさながら茹蛸のようであつた。

「あつ……くうはあ……んんくつ。あはあ……やああ……」

愛らしい薄紅の唇をぱくぱくとさせて艶かしい吐息を漏らす。目の前に、男の顔がある。「どうかね? 芽ばかりでは切ないばかり。早く楽になりたいなら、正直になることだ」

いやらしく耳元で囁きながら、くいくいっつと腰を軽く動かされる。鈴口が牝突起を食み、

チクリと鋭利な淫悦が突起の根元まで響き渡る。

娘は応えず、ぼやけた視界を覆う奸臣の顔から目を逸らす。今、口を開いても喘ぎ声以外上げられまい。それにもしも男の目を見てしまったら、牡が恋しくて仕方ない牝の本能に理性を奪われてしまふに違いなかった。

「つれない反応ですなあ。しかし抱きついておきながらそんな態度もないでしょうに？」

言われて自分の状態を確認して少女は愕然とした。あろうことか彼女は男の首に手を回し、ギュッと抱きついてしまっていたのだ。細脚も心持ち宙に浮いて、股の間に割り込んだ男の腰に絡みつきそうな勢いである。傍から見たらどちらが誘っているのかわからない。「ちがうっ!? 身体が勝手にやってるのおっ、お前が飲ませた、薬が悪いのおおっ!!」

情けない牝の本性を露にされて、偽姫君が泣きじゃくりながら首を振る。そんな哀れな少女を更に追い詰めるように、男は娘を抱きしめてその首筋に舌を這わせ始めた。ぬつとりとした濡れ舌に敏感な肌を舐られると後頭部の辺りがジンと切なく痺れてしまふ。

肩を抱いていた指は再び乳峰を襲い、大の男の手にも余る豊満な果実をパン生地のように捏ねくり上げる。先ほどより何倍も感度の増した肉釣鐘は硬い指のめり込むたび、砂糖のように甘い快感が岩間から湧き上がる水のようにじゅわつと滲み出てくるみたいだった。

牡の臭いはますます愛おしさを増した。呼吸のたび、恋をした時のように胸が一杯になる。そして許せないことに、目の前の悪魔が恋しく、全てを捧げてしまいたい衝動が沸き起こるのだ。呼吸を止めようにも、全身を苛められては二秒と持たずに喘ぎが漏れた。

そんな瀬戸際で、大臣はまたも腰を揺すり出した。くにつくにいいっ……硬い肉棒の先端で起用に陰核を覆う肉の包みを押し上げてゆく。それだけで、接点から桃色の火花が幾度も散って気を失いそうになる。何度目かにつるんっ、と包皮がめくれ上がり、つやつやとした桜色の宝石が飛び出した。

ぞわわわわ。クリトリスを剥かれた瞬間、身体中を羽虫が踊り回るようなざわめきが走った。まるで丸裸に剥かれて山中に放り出されたような、どうしようもない心細さ。

ぐりいい……肉槍の先端が無防備な肉真珠を一思いに刺し貫く。

「はあああああうぐうっ!? あああがあううう——っっっ!」

首を折れんばかりに仰け反らせ、乙女は獣じみた鳴き声を上げた。口からは泡状の唾液がだらだらとだらしなく流れ落ち、瞳からも喜怒哀楽を無視した涙が零れて美貌を濡らす。肉槍の突きはそれでも中断されることはなく、正確なリズムを刻みながら牝の急所を撃ち続けた。くりっくりっくりっ……充血しきった肉豆は捏ねられるたびまだまだ膨張を繰り返し、神経をより過敏に研ぎ澄ます。押し込められるごとに、すぐ傍の膣口からはぶしゅるっつと白濁した粘液が飛沫となって噴き上がり、男の陰囊を濡らした。

「がっ……うぐうう………にひぎいい——っ!!」

貧血みたいに頭の中がスウッと白みがかかり、何も考えることができない。あるのは陰核の疼きだけ。子宮の渴望のみが増殖を繰り返し、頑なな反抗心をも飲み込んでゆく。

三度、亀頭がクレヴァスを抉った。ぬぶっ、とゲル状の蜜液が押し出されて尻を濡らす。

っしやくれたお転婆をなあ!? ひひひ、鳴け、もつと鳴けえ!」

シエリルに余程恨みがあるのか、奸臣は狂ったように笑いながら滅茶苦茶に腰を使って処女の肉壺を突き回した。

ぬぶっぬぶっぐぬぶるりゅうう——突かれれば突かれるほどに肉華は甘い蜜を湧き立たせる。子宮口を何度となくノックされ、下腹部で火花が弾けたような激震が無数に轟く。

「あひゃあつ、らつすごい……ひっ!? だめだめ早すぎいい——つつ!!」

壊れたように叫んだ替玉姫は今度こそがっしりと男にしがみついてしまう。そうでもない肉悦という未知の衝撃に堪えられそうになかったのだ。だが、それは結果として牡をより深く啜え込むこととなってしまい扱られた子宮がズキンと重く疼きを増した。

男はまるでふいごのように正確なリズムで抜き差しを繰り返し、ピンクの牝粘膜が捲れ上がるくらい激しく引き抜いたかと思えばそれを一気に押し込んで子宮を潰した。

「ほれっシエリルよよいか? よいであろう私の一物は……んんっ?」

「んっううっ……あうっぐ……しえり、る……?」

途切れることのない喘ぎの最中、偽姫君は大臣が口にした名を反芻する。意識が飛んでいてよく分からないが、なんだかとても大切な名前。

「お前の名前だよ、シエリル姫」

奸臣はぐちゃぐちゃと蜜穴をほじくりながら、含み笑いと共にそう囁いた。

「あ……んう……ちが、わたくひ……は、ニーナああんっ!!」



シエリルと偽っていた時期が長いからだろうか。自分の名を名乗りながらもあまり実感がわかなかつた。本当の名を名乗ろうとするが剛棒の突き込みに遮られてしまう。

「いいや、お前がシエリルだよ。ラゼアニア女王のシエリルⅡフォン Steele ヴイアンカ御本人さ。違うのか？ だったらコレはお預けだなあ……？」

ずぶり、と愛液を纏った剛棒が膣口から引き抜かれそうになる。大切な宝物を取り上げられたみたいには堪らない喪失感が女陰に広がった。

「だめえっ!? や、やめちやいやあ……」

自分を捨てようとする恋人に縋るように少女は男に泣き付く。彼はここぞとばかりに、「ふむ……ではお前は誰か言つてごらん。そうしたらもつと気持ちよくしてやるぞ？」

「だ、だからわたくひはニー……ひあ、だめ、抜かないでえ!？」

少女が再び名乗ろうとしたのを阻むようにして、亀頭が小陰唇まで引き戻された。

ペニスを抜かれる、もう気持ちいいのをしてもらえなくなる。そんなの、絶対イヤだ。どうすれば、続けてもらえるのだろう——媚薬漬けの頭が必死に答えを探す。

(わたくしが姫様に似てるから、してもらえるんだ……うん、似てるだけじゃ、だめ)

「しえ……しえりるですつ……わたくしがあ、しえりるですからあ……やめないでえ、もつと……くちゅくちゅつて……してえ！」

必死だった。そう言えば気持ちいいのを続けてもらえる——その一心で娘は嘘をついた。「そうだ、お前こそシエリル姫だ！ ……ほれ、そろそろ射精だすぞ、シエリルッッ!!」

肉の楔くさびが一際強く打ち込まれる。ズンッ!! と胎内を突き破らんばかりの淫激に子宮が歪むくらい押し潰され、孕み続けた淫悦の塊が一気に弾け飛んだ。

「はきゅううっ、んあつてつてるっびるびるつてえつわたくしもおおああ——!!」
びゅくんっ、どびゆる、びゅりゅ、びゅくりゅんっ!!

しゃくり上げる肉筒の先から射ち込まれた子種汁が子宮に直接ぶちまけられる。待ち侘びていた更なる淫激に、少女も絶頂へと吹き飛ばされた。

視界が白一色に染まり、身体中の細胞一つ一つが風船みたいに破裂する。どくどくと脈打つ肉棒を中心にして、眩い光が瞬くように淫悦が四肢の隅々まで突き抜けた。

息が、心臓が止まりそうなほどの衝撃。自我を失いそうなほどの極みの中で、胎内から波紋のように広がる甘美な陶酔が雪崩のように押し寄せ何もかもを飲み込んでゆく——。

「くかかかか……いい味だったぞ、やはり初物は締まりが違うな。さて、今度はこちらを試してやるとしようかな——とところで。もう一度問うがお前の名前は何だったかな?」

柔尻の谷間に大臣の指が滑り綻びかけた菊座を擦る。それだけで、絶頂の余韻覚めやらぬニーナはびくと身体を振らせた。もっと、して欲しい。そのためには——。

「わたくし……は……あっ♥ シェリル……です……ヴイドックさま……だから……ね?」
光を失った碧い目の少女は媚びを売るように壊れた微笑を浮かべた。つい先ほどまで淑女だった、しかし今は媚毒に墮落した牝奴隷を前に、悪魔は満面の笑みと共に深く頷いた。

くにくくにゆくにゆくにゆく……早く終わらせたい一心で、少女は手中の肉棒を揉みだす。牡獣どもを喜ばせるのは癪だったが、そうしないといつまでもこの汚らわしい腐肉に触れていなくてはならないのだ。

シエリルのそんな思いなど知らぬ男たちは積極的になった彼女を嘲弄し、次々と牡凶器を差し出してはその手淫に先走りの汁を滲ませた。ツインテールの少女はそのたび屈辱に奥歯が砕けそうなほど歯噛みしながら、形のよい鼻先をそれに近づけるしかなかった。

手首ほどあるのに脂身みたいに柔らかな肉棒、小枝程度の太さのくせに石よりも硬い牡根——様々な男根の感触を掌に刷り込まれる。これら全てが女を、自分を狙っていると想像すると気が遠くなりそうだ。

「あ……」

手淫奉仕を続けていた少女が小さく声を出した。最初の男のペニスを前に、ようやく自分が一巡したことに気づいたのだ。もうマスクで覆われた男の顔よりその肉棒の方が個人を判別できるくらい彼らの牡根を見慣れている。そんな自分に姫君は恐ろしさを覚えた。

代わる代わる抜き続け先走りの汁を嗅ぎ分けたものの、遂にグラスの中の精液を放った相手は探し出せなかった。それどころか男の臭いを直に嗅ぎ続けたせいで肉体の疼きは酷くなるばかりだ。乳首はパンパンに充血しているし、陰部など触れてもいけないのに蕩けたように潤みきっている。そんなことがバレたら、どんな嘲笑に晒されるか分からない。内股を閉ざし、背中を丸めて周囲の男に発情を気取られないようにするので必死だった。

「さあてシェリーちゃん、ギブアップかナア？ 夜が明けちゃったら時間切れだよ？」

しばらく動きのない少女を急かすように、ロメロが顔を覗き込んでくる。

「ちよつと待つてよ！ すぐに当ててやるから、黙って見てなさいよ……」

焦りを滲ませ改めて周囲を見回す。自分がズボンから引つ張り出し、愛撫を施し屹立たせた勃起ペニスが四方からこちらを狙っていた。大小織り交ぜた牡の象徴は、そのどれもが中途半端な奉仕によって辛そうにびくびくとしゃくり上げている。男たちの目も劣情に駆られて醜く血走っており、本能に任せて今にも襲い掛かってきそうな勢いだった。

(こうなつたら………実際に精液を出させて、それを比べるしかない)

できれば回避したい手だった。しかしペニスの臭気、体液の芳香などではどうやら判別は不可能らしい。となれば、替玉少女を救う手段をシェリルは他に知らなかった。

三度、男の股間の前に膝立ちで立つと両手で剛直を包み込む。最早最初に抱いた嫌悪感はどこかに消え去っていた。一刻も早く、この牡銃から獣汁を搾り取らなくては。ブロンド少女は牝牛の乳を絞るように、肉棒をぎゅつぎゅつと締め上げ抜き出す。

シユツシユツシユルツシユルツ……十本の白い指が肉筒を按摩し、牡粘膜を撫で上げる。手首にスナッパを利かせて筒の全体を撫で回し、反応から感度のよさそうな裏筋を爪先でコシヨコシヨと意地悪く擦ってやる。

「おつ、さつきとは段違いじゃねえかよ……こりや堪んねえなあ！」

僅かの間に上達を見せる少女の奉仕に、男は感心と嘲りのない交ぜになった声を上げた。

「だったら……さつきと射精しなさいよ……気持ちいいんでしょ……」

透明な液体を滲ませるばかりで肝心の精液を放つ心配のない相手に、少女はぶつきらばうにそう返す。それを聞いた男は小馬鹿にでもするように鼻でせせら笑った。

「おいおい、もしかして俺のことイカせる気なのか？ 幾らなんでも餓鬼の手コキでなんかイけるかよ。ザーメン欲しけりやせておしゃぶりぐらいしてみせな」

その言葉に今度こそ少女は固まった。触れるのだって心を凍てつかせて何とかやっているのだ。臭いを嗅ぐのだって本当は死にたいくらい恥ずかしいし、吐き気がするほどおぞましい。それを、それを——口に含めだなんて!!

「イヤよッ!! こんな汚らしいモノ、口になんてできるわけないじゃないっつ!!」

叫んだ姫君は目の前に突きつけられたペニスから顔を背ける。反動で、ツイントールの一束が脈打つ肉棒をふぁさりと撫でた。

しばらく傍観していたロメロだったが、少女の拒絶にやれやれといった風に口を扶む。

「ふうん……関係のない話ですが、この国のお姫様はテラスで星を見るのが好きなんだそうですネエ。でも危ないなア、誤って手摺から滑ったりしたら、大怪我しちゃうなア」

遠回しな脅しだった。しかしその効果は靦面^{てきめん}で、シエリルは背けたはずの美貌を再び牡の欲望へと向き直す。瞳には涙が今にも零れて頬を濡らしそうなくらい玉になって溢れていた。その蒼眼で牡器官を睨みつつ、娘は花びらみたい唇をゆつくりと半開きにする。

強烈な酢酸臭がむわつと呼吸を覆う。吐きそうになって、堪えた。その根源を、自分は

えているだけ。そんな稚拙なおしゃぶりに、男が文句をつけてくる。

(そんなこと言ったってこんな生臭いモノ、唾える以外にどうしろってのよお……!?)

許されることなら今すぐにも吐き出したかった。しかしここまでやった以上、射精に導かなくては何のために下種の汚らわしい陰茎まで口にしたのか分からない。

とりあえず口内に溜まった唾液をじゅるじゅると吸りながら、舌先で李のすももような亀頭を舐め上げてみる。先ほど目にした先走りの汁の苦味を桃舌に感じ、ブ Rond 少女は顔を顰めた。肉棒を濯いだ唾液など死んでも飲み下したくないので、口端からだらだらと垂れ流す。しかし涙目で男の剛直に奉仕する薄紅の唇から、形のよい顎を伝い白濁した唾液が床に至るまで粘つく糸を引く様は、少女が自覚している以上に淫らであった。

「んっ……んぐっ……あむっ……ちゅっむんうう………」

可愛らしい鼻息と、粘膜の擦れ合うくちゅくちゅという濡れ音がしばし舞台を支配していた。他の男たちも小娘の肉棒奉仕を固唾かたずを呑んで凝視している。

「お、いいじゃねえか……何だかんだ言って本当はチンポが大好きなんだろう？」

醜く頬を緩ませた男が口汚く罵るが、奉仕に気を取られていた少女にはそれさえ届かない。ただ口の中の牡器官を射精に導くことだけを考え、窄めた唇で肉竿を抜き続けた。

じゅぷっじゅぷっじゅぽっじゅぷうっ……肉棒が唾液を攪拌する音がしばし続く。

「いい……ぞ……その、調子だぜ………」

男が次第に腰を前後に揺さぶり出した。喉奥を無闇に突かれてえずきそうになるのを堪

える。牡の腰振りを制するように唇を窄めるが、それが却って男の快感を増大させる。ぐじゅっじゅるつくぽおっ……口を濯ぐような水音はいよいよ大きく、早くなる。

「柔らかい舌してやがる……うっ……よし……ご褒美のザーメン、くれてやるっ!!」

ぐっ!! 叫んだ男はまたも少女の後頭部を引き寄せ、肉楔で食道まで穿つ。

「ふごっ!! んごむぐおおっ!!」

喉を扶られ蒼眼を剥いて悲鳴を上げる。男はそれを無視して遠慮なく射精を始めた。

びゅくりゅっ!! どびゅるっびゅるぶっびゅるうう——!!

「んごっ!! ごふおっむおっごおぐううっ!! きやはうっ、きえほっげほおっ!!」

喉奥を数度穿たれ、胃に直接牡液を注がれたツインテールの猫少女は牡根と精液とに呼吸を塞がれ蒼眼を見開いたまま無様に呻く。男はそれでも少女を解放せず、どくどくと脈打つペニスは最後の一滴まで乙女の口腔に子種を吐き出し続けた。

「ふう……すつきりしたぜえ」

ちゅぷっ。放精が終わり、唾液と白濁に塗れた男根が桃色の唇から引き抜かれる。ようやく解放された少女は顎が外れたみたいに口を開いたまま、けほけほと咳き込み続ける。

口の中のみならず鼻の中にまで牡汁が染み込んで青臭さが呼吸に纏わりついて離れない。何度も吐き出そうとするが、喉の奥に絡まった白濁粘液は食道粘膜にへばりつき、いつまでも生温かな獣臭を与え続けた。

「おええっ……ごふっ……はあっ……んごきゅっ……なに……ゲホッ……するのよっ!!」

猫耳の娘はぼろぼろと涙を零し、頬を黒に近いくらい紅潮させて怒りの抗議をするが、
「あん？ 欲しがってたザーメンくれてやったつのに、何キレてんだよ？ 俺はお前の
客だろ？ お客様に向かつて何様のつもりだ？」

「反対にとんでもない言いがかりを付けられてしまう。」

「おいおい、せつかくザーメン恵んでやろうつのに。プチ切れられるんじゃ俺、しゃぶ
らせてやるのやめちまおうかな」

他の客たちがクスクス笑いながらそう囁き合う。そんなことになったら一番困るのはこ
の哀れな牝猫少女であることは、彼女を含む舞台上の全員が心得ていた。

「ほらほら、シェリー。ご褒美をくださったお客様にはきちんとお礼を言わないと」

ここには彼女の味方などいないのだ。道化までがそう嘖^{けしか}け、少女に更なる屈辱を強いる。
「……ありがとうございます」

精液に濡れたいちごミルク色の唇を震わせ、少女が小さく呟く。心にもないことを言の
葉に乗せるのが何より嫌いな彼女は、その一言を口にしただけで自分の信念を砕かれたよ
うな気がした。胸の中を喪失感が吹き抜け、またも涙がじわりと滲んで視界を曇らせた。

「よしよし、いい娘だ。じゃあ今度は俺のチンポペろペろする権利を与えてやるよ」

言って隣の客が己の一物を上下に揺すり、ペットに餌を与えるようにそれを差し向けた。
「ちよっ、ちよっ……待って……よ」

促す男を制すると、少女は一旦くるりと反転し精の注がれたグラスへと向き直した。

どさくさのうちに精液を飲まされてしまったが、確かに直に味わうのが一番手っ取り早い。ならば目当てである「コレ」の味を覚え込まないことには、テイスティングなど仕様がな——瞳を閉じ、深く大きく息を吐く。

(本気で当てるなら……やるしかないんだ)

その瞬間、少女はこっそり隠し続けてきたプライドを本気で捨てる決意をした。

水飲み鳥のように頭を下げ、突き出した唇をグラスへと寄せる。鼻腔粘膜をあのお臭さがまた強襲して、鼻を潰されそうだった。痛いくらいの刺激臭にブルーの瞳が潤んでしまう。涙を堪えつつ舌をピンと伸ばし、緩慢な動きでそれを水面に伸ばす。

ちろっ。白濁を桃色肉のさじで掬って口腔内に迎え入れる。その瞬間、身体中を電気が突き抜けるようにぶるっと身震いしてしまう。味という味はなく強いて言えばほんのり苦い。そして人肌並みに生温かであり、食感はぬるりとしていて捉えどころがない。

「ギャハハ、あいつ自分からザーメン飲んでやがる！ 普通娼婦だってやらねえよ!!」

「子猫ちゃんだからミルクが好きなんですよ。僕のミルクも飲ませてあげるからね」

背中に突き刺さる悪意に産毛が逆立った。聞こえない振りをして再びグラスへと顔を近づけ、ミルクを飲む子猫みたいに粘液の中で舌をぴちゃぴちゃと泳がせる。

「べちゃっぴちゃっ……んっう……ちゅるるっ……こきゅんっ」

呼吸を塞ぎそうなほど粘っこい子種をやつとのこと飲み下す。それでも淫臭はいつまでも口腔内に纏わりついていた。呼吸に混じる精臭を吸えば吸うほど、息苦しさが胸に押

し寄せてきた。堪えつつ、味、臭い、粘り気……ありつただけの情報を頭と舌に叩き込む。

（この味と、同じものを探すのよ——さっきの男は……たぶん、違う）

苦虫を嘔み潰したような表情で、ツインテールの猫耳少女はしばしそれを反芻する。そして再び先ほどの男の下に摺り足で近づき、絶えず屹立し続ける陽根に半開きの唇を寄せた。

はむっ、と亀頭を咥え込む。相変わらず生臭いが、慣れが働いたのか我慢できないほどでもない。また、先ほどの男に比べて長さも太さも劣っていたから咥えるのもそれほど苦ではなかった。あむあむと唇を蠢かしながら根元まで一気に飲み込んでやる。鋼のように硬い陰毛が鼻先を擦り、頬を刺す。牡独特の汗と体液の膾えた臭いが、頭の奥の方をぽおつとさせた。気が遠くなるのを堪え、肉根を舐めしゃぶる。射精を促すために男の勘所を探し、舌をれるろると蠢かして男根の外周を撫で回してゆく。

「そうそう……舌をいっぱい動かして……チンポの裏のところを念入りにね……」

男は悦に入ったように上擦った声で命令を下す。聞いてやる義理もないが、それでこいつの射精が早まるならと唾液に濡れた舌腹でぬるぬると肉竿の裏筋を舐ってやった。

「はふっ、あむう……んふうっ……れるっ……ちろちろちろお……ねろおおお」

幸か不幸か。元来要領のいいシエリルは、いやいや始めた口淫奉仕をほんの僅かな時間で、ものにしつつあった。

剛棒を半分ほど咥え込み、はむはむと唇を使って丁寧に締め上げ愛撫する。口の中では舌をくるくると旋回させて亀頭と肉筒との溝をくまなく舐め上げ性感を昂らせ、頃合を見



計らって根元まで飲み込み、ちゅうちゅうと情熱的に吸引して放精を促す。

肉筒がびくびくつと痙攣の間隔を早めればしめたものだ。口を思いきり窄め、口腔粘膜を牡器官にびったりと密着させて肉棒を飲み込むようにひたすら啜り続ける。

「あつシェリーちゃんっ、そこいい……もう射精ちやうよっ……全部、飲むんだよっ!」

この男は言葉を言い終わらぬうちに乙女の口内目掛けて精をぶちまけた。

「んごっ……もごうう……ふごうごっ!? もおごっ……むごお……」

ペニスを唾えたまま、姫君はくぐもつた悲鳴を上げる。びゆくびゆくと注ぎ込まれる牡液は結構な量で、最初の男より濃密な味が味蕾に滲んだ。すぐにでも精を吐き捨てたい。

「せっかく頂いたご褒美なんだからちゃんと飲むんだヨ。そうしないと……分かってるネ?」

見透かされたように、道化の言葉が少女に釘を刺す。牡の汚液を飲み下す——シェリルにしてみれば泥を啜るようなものだったが、そうまでしてでもやはりニーナが大事だった。

「んう……ちゅっ……ぢゅるっ…………ごきゅんっ」

殆どゲル状のスペルマを苦い薬でも飲むように苦渋の表情で飲み下す。この腐液が胃の中で消化され、自らの肉体の一部となるのかと想像すると堪え難い汚辱に見舞われる。

(考えだしたら負けよ、無心でいかなきゃ——)

「はむっ! あむっおふおっ……ぬろつれるおお……あむあむ、あんううう……」

少女はすぐに次の牡を唾え込んで喉奥まで飲み込み、舌を這わせ唇で揉みしだいてゆく。

二人の男を射精に導いたことで、姫君は男根の急所を大体捉えていた。

「こっ、どこで覚えたんだそんな舌づかい……くう、もう射精ちまうっ……!!」

どびゆるっ!! びゅぶっ、びゆるるっ、びゆるううっ! びゅっ、びゅっ……!!

「この淫売がっ! 本当は毎日団員の精液便所やってんだろ……うっ、射精すぞっ!!」

びゅくんっ!! どくっどびゅっびゅぶるう——っ!!

「おら、お口にいっぱい射精してやるから、俺のチンポ汁も一滴残さず飲めよ……!!」

ぶびゅびゅ——っ! どびゅっ、びゅくるっ、びゅぶっびゅびゅぶううっ!!

実に手際よく、姫君は次から次へと男の欲望を処理してゆく。そのたびに口の中一杯に吐き出される命のエキスは、固体といっても過言ではないくらい濃密だった。粘り気を帯びたそれは独特の臭いで牝を醗酵させる。クラクラする意識の中で、少女は尿道に残る残滓の一滴まで搾り取るように、肉棒を締め上げて根元から鈴口まで唇を這わせた。

ちゅぶっ、と白い糸を引きながらペニスを吐き出した少女は口の中のザーメンを零さぬようにすぐさま唇を窄める。僅かに漏れた子種汁が果実にも似た下唇を淫らに濡らした。

次の男に取り掛かろうと手を伸ばすと、剛直がそれをはぐらかすように逃げる。不思議に感じて顔を上げると、仮面の男と目が合った。気弱で卑屈そうな、いやらしい目だ。

「しえ、シエリーちゃん……本物だあ。近くで見ても可愛いねえ。いつ、いつも舞台観てたんだよお……ふふふ、ボクのおチンチン、しゃぶりたい? しゃぶりたいよねえ?」

気味の悪い含み笑いと共に尋ねられる。言うまでもなく、そんな不潔なものの口にしたいはずがない。だが、そんなことを言えば自分の首を絞めるだけだと蒼眼少女も弁えていた。

自慰の経験はあった。しかしそれは深夜にベッドの中でこっそりと、パジャマの上から胸を揉んだり、せいぜいドロワーズ越しに陰部を愛撫したりと、とても慎ましいものだ。人前でなんて——しかし、今の彼女には恥じらいなど感じている暇などなかった。

「……………ふあ……………んうっ」

前から股間に手を伸ばし、秘裂を撫でる。ピリリッと快感が瞬き、小さく声が漏れた。「なにお上品にやっつてんだよ？ 豚臭いマ○コしてるくせによお？」

客席から罵声が飛ぶ。舞台上の男の顔色を窺うと、彼も不満げだ。慌てて指使いを激しいものへと変える。膣口に指を差し込み、ペニスに見立てて抜き差しを繰り返してみる。くちゅっぬちゅっちゅくつくちゅくちゅぶう……………。

白魚の指先がミルク色の粘液に塗れ、滑らかな指の刺激に陰肉が甘く痺れる。指を入れたのは初めてだったが、指関節のコリコリとした感触が堪らなく心地よい。

「ふあっあっああ……………ふああああ……………♥ ああ、だめえ……………ゆびいとまらない……………のおお」
私たちの視線が気になったのも最初のうちだけだった。右手と肉壺ばかりに意識が集中し、湧き上がる快感に魅せられた姫君はひっきりなしに淫穴を掻き乱し続けた。

「うへへ……………ケツ穴までひくつかせやがってド変態が。いいぜ、その調子でやんな」

そっと視線をやると、男の陰茎は先ほどより充血している。もっと、その気にさせなくては——膣道を扶る指の数を増やし、三本の細指でほじくり返す。そのうち陰部の快感だけでは飽き足らなくなった少女は、空いている左手で重力に引かれる乳釣鐘を掬い揉む。

「あはああ……いつ、いいい……おっぱいっ……じゅんじゅんっ……いつて、るう……」
ぐにつぐにゆいっ……男にされる時より僅かに優しく、丁度自分の一番気持ちいい強さ
で乳房を捏ね、指腹でこっそりと乳豆を搾った。

とぶっ、くちゅぶっ、じゅぶうう……乳を捏ね回しているうちに肉割れから溢れる恥蜜
の量も増し、小粒の真珠みたいな飛沫が無数に飛び散り、牝の発情臭を辺り構わず撒き散
らす。そしてそれは舞台上の男にも届き、その本能を刺激したようだ。

「いやらしい臭いだぜ……牝奴隷は沢山見てきたが、お前みたいな恥知らずは初めてだ」
その剛棒はもう完全に屹立していた。今にも襲い掛かってきそうなほど、苦しそうなく
らい硬く熱く勃起している。それを見て、少女は思わずゴクリと生唾を飲み込む。

(硬そう……太さもすごいし……あんなの挿入れられたら……狂っちゃうかも……!!)

恐怖と期待が同時に胸に押し寄せ、陰裂が視界に捕らえた牡器官を欲しがるようにキユ
ンと疼いた。それを治めるように、指はますますぐちゅぐちゅと淫らに肉壺を抉る。

「本当に蕩けてるみたいじゃねえか……欲しいか？ オレの一物をぶち込まれたいか？」

蜜を溢れ返らせているシェリルの女を鑑賞しながら、男が上擦った声で問いかけてくる。

「ぶひっ！ ぶひっぶいっぶひい!!」

獣の鳴き真似で、姫君は必死に肯定のサインを送る。肉穴に突き入れた指を開いて秘裂
を内から押し広げ、サーモンピンクの肉華を咲き乱れさせ牡を誘い込む。

「ふくくくく……よしよし、じゃあご褒美の餌の時間だ。自分からコレを挿入れに来な」

ようやく貰ったお許しを前に、蒼眼姫の表情が晴れた。胎内を蝕む、動悸の如く激しい欲情を満たすこと。その目的の前にあつては屈辱など些細な事柄に過ぎなくなっていた。

「ぶひっ♥　ぶひぶひいんっ!!」

四つん這いのまま鼻を鳴らし、じりじりと背後ににじり寄る。待望の牡根までは大股で歩けば三步足らずの距離なのに、まるで遙か遠方にいるかのようになかなか届かない。

つんっ。ようやく、本当にようやく熱い肉棒の先端が柔尻を突いた。腰の位置を微調整して股座を相手の高さに合わせる。ほんの少し腰を進めると、ドロドロに蕩けた女陰をぐちゃりと割って亀頭の先が埋まった。

「ぶひ…んふああ…んううふうう…う、うう」

膣口を軽く擦られただけで、腰が砕けそうなほどの甘い痺れに酔わされる。骨が砂糖にでもなったようだ。思わず豚の鳴き真似を忘れてしまうが、男たちはもう咎めては来ない怖かった。このままベニスを受け入れたら、あまりの快感に取り返しがつかないくらいに乱れ、もう二度と本当の自分には元に戻れなくなる。そんな予感が少女の中に渦巻いた。それでも、女体は馬が人參を鼻先に突きつけられたように牡を欲しがり、牝尻は少女の葛藤など気にも留めずにくいっと更に突き出される。

ぬぶっ、ずぬういいい……!!

「んはああううっ!!　あぐうっ、あついい——っ!!」

脛道一杯に牡根を飲み込んだ少女は、その灼熱に悲鳴を上げた。本物の火かき棒を捻じ

込まれたって、こうも熱く焼けはしまい。待ち焦がれていた異性の侵入に、牝粘膜は蒸発しそうなくらいに燃え盛っていた。

初めて味わう男のペニス、それは豚のモノとはまるで違っていた。獣の螺子肉よりも太く、硬く、そして逞しい。豚の陰莖のようなギミック性こそないが、膣穴が開きっぱなしになりそうなくらいに頬張らされた牡肉は「満たされた」という充足感を少女に齎した。

牡根の表皮に触れる膣粘膜はふつつつと湧き上がる熱湯のように疼いて蕩け、牡粘膜と癒着するように剛直を包み込んでいった。心地よい圧迫感と胸の芯まで蕩けそうな恍惚に、シエリルは自分が女であることを、自分の身体はこれを受け入れるために造られているのだということを感じ知らされる。

「あつくうう……すご、かっ……かたい……」

ゆっくりと腰を動かし、押し込んだ肉棒を引き抜く。ぬるりとした粘膜同士の擦れ合う感触が狂おしいほどに心地よい。犬の姿勢のまま、腰を前後に振ってしばし牡を食った。

「豚とヤッタわりにはまだまだキツキツだな……へへ、もっと気合入れてケツ振れよ」

パンパンッ、と男が戯れに熟れ桃をひっぱたく。その刺激に肉壺がキュウッと収縮して啞えた男を更నికిつく締め付けた。改めてその硬さ、存在感を思い知らされ子宮がズンッと重みを感じる。

ある意味で強制されているとはいえ、シエリルの姿は盛りのついた獣そのものだった。男が腰を使う間もないほど、少女は柔桃をせっせと前後に振りたてて男根を飲み込んで

吐き出し、啜え込んで締め上げた。ヌルヌルと蜜液が絡まって、肉壁を快感が舐め回す。「んっ、んふうっ……あっだっめえっ……なかつでえ……コリコリって、すごいいいっ……」自分が主体となって腰を使うのは初めてだったため、最初はやはりぎこちない動きだった。それでも時が経つにつれコツを掴んだ少女は忙しなく腰を振り始めた。肉と肉の交合にくちゅくちゅと淫らな音が加速度的に増殖してゆく。だというのに、幾ら激しく交わろうとも、抽送を繰り返せば繰り返すほど快感と一緒に飢餓感も膨らんだ。

もう下種に汚されているという感覚はなかった。身体が、本能的に牡を求めていた。パンパンパンパン……尻で男の腹を打つように、少女は忙しく腰を振り乱した。時折根元まで啜え込み、亀頭の先を子宮口でぐりぐりと捏ね回す。お腹の奥が打ちつけた太鼓の皮みたいにビィンツと痺れ、湧き上がる快感に頬が緩んだ。

「へっへっ……おっぱいも物欲しそうだぜ……」

男は交わる少女を侮辱しつつ、両手を脇から胸元へと回す。狙いは無論、腰振りに合わせてぶるぶるとはち切れんばかりに揺れ動く白い乳果実だ。

ぎゅにゅううっ！ 男は一分の遠慮もなしに乳峰を握り潰した。その美麗なお椀型が変形しそうなくらい凶悪に、力一杯捏ね回してくる。

「うはあんっ!! あっ、んにいいい……むね、いいっ……おっぱいがいいのおおっ!」果実をもぎ取るような搾乳に、一層甘い悲鳴が口を突く。媚薬中毒の少女にとって痛みは肉悦と同義だった。柔肉への按摩に少女は骨を抜かれたように脱力させられる。対照的

に男の熱氣を孕んだ掌で押し込められる乳豆には、雷撃にも似た鋭い乳悦が炸裂した。

むにつぐにつむにゆういひいひい……！

指の跡が一生残りそうなくらい苛烈な搾乳が続く。指と指の間から柔らかな肉がむにゅりとはみ出て、張り詰めた乳肌は水を浴びたようにじつとりと汗ばんでいる。

(あ、あ……おっぱい、揉まれてるだけなのに……なんで、こんなにいいのおお……?)

乳奥から湧き上がる快感に少女は炎天下の犬みたいに舌をだらりと垂らしつつ、はっはっつと断続的に吐息を吐いた。乳快楽につられるように、腰の動きも激しさを増す。

「あつあはあつんつ……んあつ、あつ……あんつ……ん、いひいっ!? むねが……あ!」

乱暴される乳峰の感覚が一変したのを感じ、姫君は喉の奥で悲鳴を上げる。胸の膨らみの奥底で、何かが滲み出すような奇異な感覚に襲われる。

あまりに手酷く扱われたから、内出血でもしたのかと思った。今の自分は痛みも快楽としか認識できないから、胸部を覆うこの甘い痺れも捏造された乳悦なのではないかと。

しかしそうではなかった。胸の内側で泉のように湧き出す快感は、乳腺を通してじわじわと乳峰を駆け上ってくる。乳腺を走る疼痛に、少女はただ怯えるしかない。

「いひあ……へん……よお……おっぱいがおかしつ……なんか、なんか出てくるうっ!」

己の胸に巻き起こる異常を訴える牝奴隷に、しかしロメロは待ち構えていたように、「ふふふ……そうか。そろそろだとは思っていたんだが……お薬が効いてきたみたいだね」

薄気味悪く笑いかけてくる。これもまた、彼の仕掛けたことだったのだ。

「なにっ……なに、飲ませたの……あんうっ……わたく、しい……どうなっっちゃうの……お」
喘ぎ混じりの問いかけにも、団長。ピロは意地悪く笑うばかりだった。

「どうなっっちゃうかは自分で身をもって体験するとよいヨ。ああお客様、その牝豚の胸をもっと苛めてやってくださいナ。面白いものをお目に掛けて差し上げますので……」

「ん？ ああ……しかし吸い付いてくるみてえにやらけえおっぱいしてんぜ……へへへ」

男は道化に言われるまま、少女の白い背中に覆いかぶさりながら乳責めの手をより強めた。乳峰の裾から頂上まで、柔肉の中身を搾り出すように揉み、石より硬くしこり勃つ桜色の乳頭を人差し指の爪先でクリクリと捏ねくり回して弄ぶ。鈍重な快楽と鋭い乳悦に晒されて、乳腺の痺れはいよいよ激しさを増した。乳首の奥の方がチリチリと焼けるようだ。

「あひゃあうっ……あはうっほんとにつほんとにへんなっのおっ……あ、あ、あああ!？」

乳房が重みを増してくる。ずっしりとした感触はまるで他人の持ち物のようだ。乳肌が風船みたいに張り詰めて、男の指圧をより密に感じた。胸の中に、何かが溜まっている。

乳奥で鍋の湯が煮え立つような感覚だった。ふつふつと沸き上がるそれは今にも沸騰しそうなほど熱く感じられる。沸点に到達しようとする熱湯のように、柔肉の内側では熱気一本の光に収束してゆく。光は乳峰の丁度中心を貫くようにして、その先端へと瞬いた。

「おかしっおかしいいっでっ……え、なんか出るのっ!? なんか出るのオオッ!？」

絶叫が終わるか終わらないかのうちに、乳首が痲癩玉のように弾け——それは訪れた。

びしゅうううううう—— ツッ!!



「え……あああつ!? おつ、おつばいっふいてるううう——っ!?」

少女は一瞬、我が目を疑った。自らの乳腺から透明な液体が、シャワーのように噴出して舞台上へと撒き散らされている。放水の衝撃に背筋が弓なりに反り返り、天を向いた乳頭から屈辱の噴水が空高く舞い上がる。

溜め込んだものが一気に放たれる解放感。乳腺がじわわつと溶解するほど狂おしく痺れ、強張った肩の筋肉が弛緩する。乳房は砂糖漬けにされたようにひたすら甘い快楽に蕩けた。「あつはああああ……あ……な、なにこれ……わつ、わたくし……なにを……」

自分の胸が射出した液体を見つめツイントールの姫君は困惑を極める。発射するまでは母乳かとも思ったが、乳房に垂れる液体は無色透明で若干ねっとりとしていた。

「お前が股座から垂れ流しているやつとおんなじさ。シエリーはこれから胸でも愛液を噴くんだ……この媚薬を使ったのはお前が初めてだったんだが……いや上出来じようでき」
ロメロはよい知らせでも伝えるような口ぶりでそう答えた。

「ひやはははは！ 牝豚にはお似合いじゃねえかよ！ よかったなシエリー？」

「そ、そんな……なあ……ああんっ!? こんなやあつ、こんなのひどいい……!!」

自分の身体を人ならざるものへと造り替えられる恐怖。肉体レベルで性玩具へと貶められた蒼眼姫は悲しくなつてまた泣いた。

「なに泣いてんだよ。マ○コしながらクンニ気分も味わえるんだぜ、いい娼婦にならあ」

男は慰めにならぬ慰めを言葉にしつつ、脇下から顔を突っ込んでシエリーの乳房を口に

含む。ちゅうちゅうと吸い付かれ、勃起乳首を甘噛みされる。柔らかな舌に乳粘膜がふやける。乳射精の余韻がぶり返し、また肉奥に熱いものがたぎってくる。

「んひいむねっ！ また出るっ……いひゃあっ恥ずかしいのっ恥ずかしいのにいっっ!!」

じゅぷしやわあっ！ ごくっごくっごくうっ……男の口内へ放たれた牝汁はすぐさま飲み下され、男は次なる乳噴きを狙うように舌腹で鑢やすりをかけるように乳豆の側面を舐め擦る。

「いやああああっ……そんなだめっ、立て続けにしちゃだめえ……またしちゃうっ!!」

しゅばあっ！ びゅしゅっぶしゅっびゅしゅわあっ!!

噴乳の寸前男は口を離し、放たれる蜜液を撒き散らすように乳房を捏ね潰し恥水を搾り出す。乳球を揉まれながら指先で乳首を摘まれ、充血を加速させるように摩擦される。容赦のない搾乳に姫君の乳房は悲鳴を上げ、それでも後から後から絶えることなく湧き続ける牝の粘液を痛いくらいに硬く膨れた乳突起からぶちまけてしまう。

「うんうはあああ……おっぱいいっ、もおお……いじわるついじわるううう……!!」

胸を目一杯切なくされて、拗ねるように喘ぎ鳴く。四度目の放水の頃には肉体を改造された悲壮感は薄れ、新たな乳快楽にのめり込んでいた。乳房を揉み潰されながら、尻を振って牡根を貪る。快楽の発生点が倍に増えたことで、少女はみるみる上り詰める。

「ううそろそろイきそうだ……また飲ませてやろうか？ ザーメン好きだもんなあ？」

男の問いかけに味蕾がざわつく。また、あの子種を味わいたい……舌が物欲しげにびくびくと痙攣する。しかし今は子宮の渴きが勝った。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>